

[総合的な学習の時間]

小規模校の長所を生かした総合的な学習

藍澤 晋*

1 はじめに

平成10年の学習指導要領改訂において、小学校の教育課程に『総合的な学習の時間』（以下、総合とする）が創設された。各学校が地域や学校、児童の実態等に応じ、横断的・総合的な学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこととされた。

総合には教科書がなかったり、総合における目標や内容を各学校で設定しなければならなかったりと、他教科と異なる部分が多い。しかし、前述の通り、学校や児童の実態に応じた特色ある教育活動が展開できることが、総合という教科の魅力の一つであると考えられる。

また、平成20年の改訂では、探究的な学習の充実、体験活動と言語活動の充実など、目標や内容の改善が新たに示されると共に、年間時数が70単位時間に減少されることとなった。

まず、当校ではどんな総合が展開でき、児童にどんな力をつけられるか考えた。

(1) 学校・地域の概要

- ・全校児童9人（平成19年度）、13人（平成20年度）、12人（平成21年度）という極小規模校である。
- ・低・中・高学年に分かれて複式授業を行っている。
- ・標高500mの自然豊かな山間地にあり、戸数は約60、人口は約200人である。
- ・学校に協力的な地域住民が多い。学校行事の運動会・文化祭・校内スキー大会には、大勢の人が準備・参加してくださる。
- ・学校を存続させたい強い願いから、地域住民が様々な取組を行い、市内からの校区外通学が可能な“特認校”制度が認められた。

(2) 児童の実態 及び 総合の活動で培いたい児童の姿

- ・自分の意見にあまり自信をもてず、発表をためらったり発表の機会を人に譲ったりする児童がいる。
→総合の活動の中で、児童が興味・関心のある話題を取り上げ、物事を主体的に捉えたり進んで考えたりすることで、探究的な活動ができる児童を育てたい。
- ・人間関係が固定化されている。その結果、お互いが分かり合っている反面、初対面の人と接する時にどのように話せば良いか戸惑う場合がある。
→総合の活動の中で、同年齢の小学生から大人、未就学児童など、様々な人と出会い、共に活動したり言葉を交わしたりする中で、豊かな言語感覚を養わせたい。
- ・地域には豊かな自然や貴重な歴史的価値があるが、その素晴らしさや価値を意識せずに生活している。
→総合の活動の中で、地域の自然や歴史などに体験を通して触れ合い、その良さを味わわせたい。

以上の実態を踏まえ、当校のような小規模校がその長所を生かしながら総合が展開できるように取り組んだ。

2 小規模校の長所を生かす視点

小規模校で総合を行う際の長所は、以下の点が挙げられる。

(1) 一人一人が主体となって活動できる。

人数が少ないと、体験したり発表したりする場面が必然的に増える。人数が多いと全員に体験させることが難しい

* 南魚沼市立栃窪小学校

が、人数が少ないと全員に体験させられるのと同時に、じっくりと味わいながらできる点が良い。また、一人一人に役割を与えられるので、主体的に取り組めたり責任感も養えたりすると考える。ただ、発表することを苦手としている児童もいる。人数が少ない中である程度の発表ができないと、人数が多い中での発表は厳しくなる。そこで、発表のしかたを個別指導し、たくさん練習することで慣れさせたり、学級単位などのさらに少人数の中で発表したりするなどして、成功体験をたくさん積ませていく必要がある。

(2) 地域住民・他団体などとの距離が近く、協力体制が整っている。

学校を支えてくれる地域住民や他団体と普段から連絡をこまめに取り、協力体制を確立しておくことが、総合をスムーズに進められる要因の一つだと考える。そのために、総合や他教科で活用できる人材をリストアップし、困った時や協力して欲しい時にすぐに活用できるようにすることで、より良い総合ができると考える。

また、教師自らが地域を歩き、この地域にはどんな人がいて、どんな環境があるかを熟知しておくことも大切だ。人に出会ったら、様々なことを聞き、どんなに小さなことでも良いので地域のことを知ろうという気持ちが大切だ。

(3) 学校を離れて学習する機会を多く作れる。

“百聞は一見にしかず”ということわざがあるが、「行きたいなあ」、「実際に見てみたいなあ」という児童の思いを、実現させやすい点がある。人数が少ないので、学校所有の公用車ですぐに学校を離れ、実際に目で見たり体で感じたりできる学習を多く設定できる。現地に実際に行き行って学習する方が、児童は興味・関心を高く保てると考える。その際には、現地で学習すると児童にどんな良い効果があるかを、教師がはっきり自覚した上で学習に臨む必要がある。

(4) 他学級や全校児童で活動することで、活動の幅が広がる。

人数が少ないことで、大規模校のようなダイナミックな活動ができない点が小規模校の短所と考える。そこで、総合の活動を行うにあたり、人数が1人でも多い方が児童にとって良い活動になったり、活動が生きてきたりする場合は、各担任で相談し合い、他学級や全校児童と一緒に活動するように計画した。その際、各学年での達成目標を変えることで、学習の成立が可能となり、活動の幅が広がると考えた。全校児童一緒に活動となると、上学年と下学年の間に教え合いや学び合いの姿が見られるので、お互いに良い効果が得られる有意義な活動だと考える。

3 指導計画を作成するにあたって ～“3年間で1サークル”という指導計画～

平成19年度に総合主任になり、児童の実態や昨年度までの当校の総合の実績や課題などをもとに、これまでの指導計画の大幅な見直しを行うこととした。

まず、当校は『栃窪・地域と自然が学校プラン』に基づき、学校内だけでなく地域や自然など、栃窪地域全体を教育活動の場と考えて取り組んできている。これは、これまでに実施してきた各教科での見学学習や校外学習、生活科や総合などについて、その体験活動をすべて洗い出し、それらを整理・統合し、さらに学校として児童にどのような体験活動をさせるのがふさわしいかを、6年間の小学校教育のスパンで検討し直してきた。その結果、完成した体験活動の年間計画が『栃窪・地域と自然が学校プラン』だ。それに基づいて、総合の計画も作成している。

次に、総合の活動を以下の3つの領域に分けた。(図1)

- ◎『人と文化』・・・主に、国際交流、歴史など
[ねらい] ・外国人や外国の文化、地域や歴史に触れることで、それぞれの良さに気づき、多様なものの見方や考え方を共に、進んで触れ合いや関わりを求めようとする事ができる。
- ◎『人と自然』・・・主に、地域環境など
[ねらい] ・地域の自然と触れ合うことで、自然の良さに気づき、それらをもっと大切にしようとする事ができる。
- ◎『人と社会』・・・主に、福祉・ボランティア、情報など
[ねらい] ・お年寄りや障がい者との触れ合いを通して、他者の立場を思いやり互いに支え合う心をもって生きていこうとする心をもつことができる。
・情報を正しく選択し、利用すると共に、情報機器を効果的に利用して発表会やプレゼンテーションなどを行うことができる。

図1 総合を3つの領域に分ける

その次に、3つに分けた領域を年度ごとに組み入れる。つまり、当校の計画している総合の活動を、“3年間で1サークル”と考えて行うことにした。ただし、その年度に決められた領域だけやるのではなく、その領域をメインに展開していく形をとっている。

例えば、米作りや芋麻栽培は毎年行っている。

米作りについては毎年秋、全校児童で米販売をするので、総合の時間を使って田植えから販売までを、毎年体験し

ている。米作りの領域は『人と自然』に入るので、平成20年度には例年以上により深く学習することになる。

また、苧麻栽培も地域で毎年行われている伝統的行事なので、毎年、地域の人に協力していただきながら活動している。苧麻栽培は『人と文化』に入るので、平成19年度には例年以上により深く学習することになる。

これらのことを踏まえ、以下のような指導計画を作成した。(図2)

図2 “3年間で1サークル”の指導計画

月	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	領域『人と文化』	その他	領域『人と自然』	その他	領域『人と社会』	その他
4	・オリエンテーション (1年間の見通し)		・オリエンテーション (1年間の見通し)		・オリエンテーション (1年間の見通し)	
5	・外国語活動 (年10回程度)		・肥料まき・田起こし	・外国語活動 (年15回程度)	・情報モラルについて	・苧麻の野焼き
6	・苧麻の野焼き	・田植え	・田植え	・苧麻の野焼き		・田植え
7	・苧麻畑の観察	・特別養護老人 ホーム訪問①	・稲の観察	・特別養護老人 ホーム訪問①	・障がいとは?(調べ学習)	
8		・稲の観察			・特別養護老人ホーム訪問	・沖縄体験学習
9	・苧麻の刈り取り・苧引き		・稲刈り・はさ掛け	・苧麻の刈り取り		・苧麻の刈り取り
10	・博物館見学 活動発表(文化祭)	・稲刈り, はさ 掛け	・精米所見学 活動発表(文化祭)	・苧引き	・特別支援学級訪問① ・訪問計画立て	・苧引き
11		・米販売	・精米・袋詰め		・特別支援学級訪問②	・稲刈り, はさ 掛け
12	・苧積み	・特別養護老人 ホーム訪問②	・南魚沼と東京の自然比べ	・特別養護老人 ホーム訪問②	・特別支援学級訪問③	・米販売
		・お礼文書き	・米販売(東京・銀座)		・障がい者・高齢者疑似 体験	・『森の学校』
1	・機織組合工場見学		・振り返り		・“自分の将来を見つめる”	・お礼文書き
2	・機織り体験		活動発表会		・振り返り	・国際交流会
3	・振り返り 活動発表会				活動発表会	

年間活動計画を作成するにあたり、いちばん留意したことは、見通しをもった年間活動計画を立てることと、始めから終わりまで活動がひとつながりになっていることを、児童に意識させながら活動が進むようにしたことだ。

また、各活動において、児童に達成感や成就感を味わわせ、今回の活動が次につながっていくことを確かめながら進めるようにした。

4 活動の実際

(1) 『人と文化』において

① 地域の歴史的文化に触れる

この地域は、越後上布の原料となる苧麻(ちょま)の栽培を続けていて、当校も以前からその活動に関わっている。この活動は、当校だけで進めるのは難しいので、地域や保存協会の方々に協力していただきながら進めている。(平成21年、『越後上布』は『小千谷縮』とともに、ユネスコ無形文化遺産に指定)

まず5月下旬に、生えてくる苧麻が均一なったり、焼いた灰が肥料になったりすることを目的に、畑の野焼きをする。児童も、苧麻が燃えやすいようにカヤを敷いて火をつけたり、完全に火が収まるように水をかけたりする。そして9月初旬には、2m近くも生長した苧麻を刈り取り、幹の中から必要な部分を刃物で削いで取り出す。

これらの活動は毎年やっているので、児童はとても慣れた手つきで活動している。しかし、これらの活動をして「上手だ」、「楽しい」だけで終わってしまうのでは、目標としている児童の姿にはならない。そこでまず、教えてくださいと事前に打ち合わせをして、活動のねらいや説明していただきたいことなどを伝える。歴史的価値があることに気付かせる講話をしてくださったり、実際に越後上布を持って来ていただいたりして、児童の関心を高められるようにした。

また、報道関係に連絡して、活動を新聞記事にしてもらおうことも行った。その際、児童は記者にインタビューされ



図1 苧引きを教えていただく

ることがあるので、今回の活動で感じたことや活動の意義など、自分の思いを相手に分かりやすく伝えられるようにしておく必要がある。そのために、思ったことや感じたことなどを自分の言葉で言わせる機会を、毎回の総合や他教科で頻繁に取り入れている。



図2 たくさんの外国人と交流活動

② 外国人や外国の文化に触れる

外国語活動については、市が派遣した外国人助手と担任で、平成19、20年度は年10～15回程度、英語学習を実施してきた。(平成21年度は、『国際科』として年35回実施)

それ以外にも当校は、外国人を招いて交流を行うことがある。それは、当地区で数年前から環境保全について様々な活動を展開しているNPO法人の協力によるものである。このNPO法人を学校活動の中で効率よく活用し、連携を深めていくことによって、総合の活動がより豊かになると考える。また、職員自身も知識や体験

が豊かになり、今後、児童に対する有効な支援につながると考えている。

(2) 『人と自然』において

① “南魚沼”の自然と“東京”の自然を比べる

自分たちの住んでいる環境の素晴らしさを感じられるように、以下のような活動を行った。

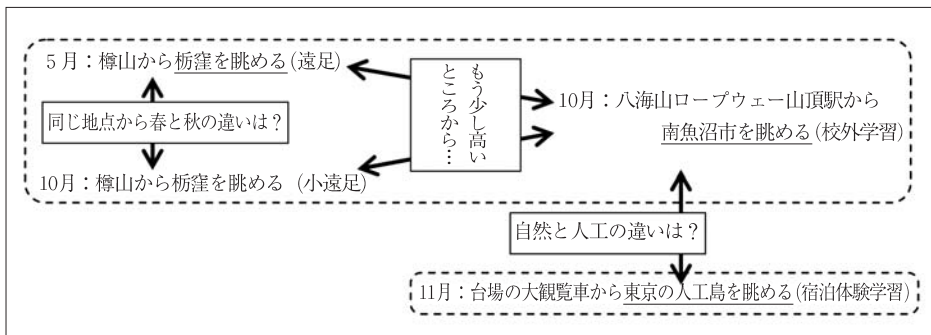


写真3 山頂駅から南魚沼市を眺める

まず、5月と10月に遠足を設定し、私たちが住んでいる栲笹地域が一望できる山(樽山)に登り、春と秋による景色の違いを見比べた。児童は、初夏の緑と秋の紅葉に染まる色の違いに気づき、それぞれの季節の素晴らしさを感じることができた。同じ地点から季節を変えて景色を眺めることは、違いを見付けやすくて大変有効だ。

また、10月にはもう少し高い地点から私たちの住んでいる地域を眺めるため、八海山ロープウェーに乗車し、山頂駅から南魚沼市を眺めた。樽山よりも高いので、遠くの山々まで良く見えた。児童は「私たちの住んでいる地域は、自然がいっぱいでいいところだなあ・・・」という思いを高めることができた。

このような思いを高めたまま、11月に宿泊体験学習として東京に行き、今度は私たちの住んでいる地域と東京の人工島(台場)とを比べることになる。観覧車に乗ると、児童は「田んぼは見えないね。」「高いビルばかり・・・。」「自然が少ないね。」などと感想を口にしていた。また、空気の違いに気付く児童もいたことから、児童は五感を働かせながら様々な違いを感じ取っていることが分かった。

この活動を通して、それぞれの地域の良さを見つけたり、私たちの住んでいる地域に対する愛着をさらにもったりと、充実した活動ができた。

② “南魚沼”の山の自然と“沖縄”の海の自然を比べる

平成21年度の夏季休業中、高学年児童4人は『豊かな自然体験学習』として、4泊5日の日程で沖縄に行って来た。私たちの住んでいる地域は、豊かな山の自然に囲まれているが、海や川で遊ぶ経験がほとんどない。そこで、山と海・川など、自然環境の違いをはじめ、文化や風習、食生活の違いなどを肌で感じるために実施した。

自然環境については、想像以上の海的美しさに感激したり、沖縄にしかない動植物を見たり触ったり、海や川でたくさん泳いだりと、有意義な活動ができた。



写真4 沖縄の海でシュノーケル体験

また、沖縄の小学校と交流活動をして、親交を深めることができた。この沖縄の小学校については、サトウキビや黒糖が送られて来たり、逆に雪を発泡スチロールに入れて送ったりするなど、以前から交流があった。ここでの交流も、前述したNPO法人とのかかわりから生まれたものである。つまり、今回の体験学習は、学校だけでなく様々な人や団体の協力のもと、実施されたものである。

文化祭では、各学年が生活科・総合の活動発表をするが、高学年は沖縄体験学習の活動報告をした。どんな方法でまとめて伝えようか考えたり、学んできたことの中で特に興味・関心をもったことをより深く調べたりしながら報告の準備を進めた。

③ 田植えから稲刈り、そして販売まで

米作りは、農業にかかわる学習として、5年社会科で行うことが多いが、当校は稲刈りをした後、東京で米を販売するまでの過程を、全校活動として行っている。

まず、米作りに関して全面的に協力していただいているのが、地元の地域農業の活性化に尽力している農業団体や地域住民である。その方々は地域にいますので、米作りに関して分からないことや疑問などがあつたら、すぐに聞きに行くことができるので、効率良く学習を進められる。稲の観察に行くと、近くの田んぼで作業をしていることもあり、その時にはすぐにゲストティーチャーになり、様々なことを教えてくださる。つまり、この地域は自然環境も良いが、学習環境にも大変恵まれた地域なのである。田んぼに行ったら、観察用紙にその日の稲の様子や聞いて分かったこと、新たな疑問などを記入しておく。

米販売は、例年11月の宿泊体験学習の時に東京・銀座で行う。キャリア教育の一環として米販売をしているが、自分たちが作った米をどのようにアピールして客に買ってもらうかを、全校児童で話し合う。「私達が作った米がなぜおいしいのか」を、これまでの活動をもとに考えさせる。そこで、「水がいい」、「空気がいい」、「適した温度になっている」など、環境に関する答えが出てくる。その後、販売する時に客に渡すチラシを作成する。その際、私たちの米は環境の良い地域で育ったことをアピールしたり、児童が体験した田植えや稲刈り、脱穀などの生産過程が分かるようにしたりしながら、作成していく。



写真5 チラシを渡して米を宣伝

(3) 『人と社会』において

① 特別養護老人ホーム、特別支援学級を訪問して



写真6 楽しくボール遊び

福祉・ボランティアに関しては、平成20年度までは特別養護老人ホームに年2回訪問していたが、もっと様々な人とかかわりをもつことを目的に、平成21年度から老人ホームと特別支援学級とを1年交替で訪問することにした。

年に2～3回訪問するのだが、2回目以降は、1回目の訪問を終えて、「自分たちでできることは何だろう」、「自分たちで計画を立ててみよう」というように、児童が主体となって活動できるようにしている。その時の話し合いも、全校児童が一つの教室に集まり、みんなが意見を出し合うように心がけている。また、一人一人にしっかりと役割を与えることで、自分がやらないとみんなに迷惑をかけてしまうという気持ちを養うこともできる。

5 3年間の活動のまとめとして

これまでの3年間で、各領域において様々な活動をしてきた。その中でたくさんの人と出会ってきた。そこで、3年目の総合の終末段階では、これまでの活動の振り返りとして、以下のような活動を試みる。この活動をすることで、3年間の総合の価値を見出し、児童一人一人の『生きる力』に結びつけられれば、この上ないと思う。

- ①これまでお世話になった人々を挙げ、たくさんの人と関わってきたことを感じさせる。
→これまでの活動をメモしてきた総合ファイルを見ることで、これまでの活動を振り返ることができ、出会って来た人を思い浮かべられる。
- ②自分の好きな表現方法で、感謝の気持ちを表す。
→近くにいる人には直接会って、遠くにいる人には手紙やメールなどで思いを伝える。
- ③自分の“将来の夢”やこれからの“生き方”について考える。
～ある人と出会ったことで、自分の夢や生き方などが変わっただろうか？～
～ある人の生き方を知ったことで、自分にできること・やるべきことはないだろうか？～
→特に印象の強かった人や、思い出に残る活動に携わった人などを想起しながら、自分の夢や生き方を考えてみる。
- ④自分の気持ちを発表し、意見を交換し合う。
→人それぞれの考え方を聞き、友達の思いを受け入れたり、友達の意見を聞き新たな夢を抱いたりすることを望む。

6 成果

(1) 改善しながらより良い活動ができる。

“3年間で1サークル”という方法で総合を計画した時、米作りや苧麻栽培など、毎年同じ活動をする児童がでて

くるので、それは児童にとって有効な活動になるのか考えたことがあった。しかし、児童の様子を見ると、毎年行う活動を楽しみにしているし、活動に対する思いや考えが年々深くなっていることに気付いた。また、地域的価値がある歴史・文化にかかわる活動では、それらに毎年触れることになるので、地域に対する愛着がさらに増したり、価値あるものをもっと大切にしたり、自分からもっと調べたりする姿が多く見られたので、大変有効だった。

学年ごとに違ったテーマや活動を設定し、児童に様々な知識や力を身に付けることも重要だ。しかし、“3年間で1サークル”という方法だと、「昨年はこちらがうまくいかなかったから、今年はこちらでいこう。」という、昨年の反省を踏まえた上で、今年の活動を改善しながらより良いものにできたし、「もっとこうしたい。」という児童の探究心・追究心に充分応えながら活動を進めることができた。

1年間の活動だけで得られないものがあると感じた時、“3年間で1サークル”という方法の有効性を感じることができた。

(2) きめ細やかな活動が展開できる。

毎年の総合では、児童にきめ細やかな活動を展開することができた。それは小規模校の長所を大いに生かすことで可能になった。すぐに現地に出かけたり、地域の人に協力していただきながら学習したり、担任間で話し合っって学年別の予定だった活動を共有したりなど、“小回りを利かせる”ことが、総合をより良い活動にさせる手立てだと感じた。

児童が、活動の中で自ら課題を見つけ出し、調べたいと思った時、児童に十分な支援ができるのが、小規模校の良さである。小規模校でなければできないプラスの部分の部分を上手に磨き、表出させることで、他校には真似できない特色ある総合が展開できたと考えている。

7 今後の課題

(1) 毎年同じ活動でも、変化をつけていく。

今回、“3年間で1サークル”という考えで指導計画を立てて総合を進めてきた。すると、米作りや苧麻栽培など、毎年同じ活動を経験することが起きる。学年ごとにテーマを決め、前学年で経験していない活動を計画していくのが一般的な方法だと思う。この方法だと、様々なテーマについて考えたり調べたりできるので、物事に対する視野が広くなると考える。ただ、毎年同じ活動を経験するとしても、ある年度には重点的に活動しようと計画しているので、それぞれの年度での目標は同じではない。

児童にとって、「毎年同じ活動でつまらない。」と思われぬように、活動計画を綿密に練っていく。そして、同じ活動でも達成目標を変えることで、児童が新たな発見をして探究心がさらに沸いたり、これまでと違う感動を覚えてさらに意欲的になったりする姿が見られるようにしていく。

(2) 教師が豊富な知識を身に付けられる環境を整えておく。

教師は、児童以上の知識を身に付けていないと学習を円滑に進められない。小規模校は職員が少ないので、それぞれの教科を専門としている教師が揃うことが困難である。それを補うために、学校外の力をうまく活用することが必要になってくる。それが地域住民や市の専門機関、NPO法人などである。学校だけの力ではできない時には、学校外に目を向けるようにする。そうすることで、児童にとって学校になかったいつもと違う目線で学習できると考える。

授業を計画している時に、素材や人材が不足「授業するには、ちょっと厳しいなあ。」と困ったり悩んだりした時は、遠慮なく学校外の協力を仰ぐようにする。それが児童の授業に対する生き生きとした姿につながると考える。

(3) 活動したことをたくさんの人に発信していく。

活動のまとめや話し合いをする場合、人数が少ないため、たくさんの意見が出なかつたり話し合いが深まらなかつたりする機会が多い。それが、豊かな言語感覚を鈍らせている理由の一つだと考える。また、文化祭や学習参観など、やや大勢の中でも総合の活動報告会を行っているのだが、一方的な発表になるのであまり緊張感がない。そこで、“様々な伝達方法で、いろいろな人に”という活動を多く取り入れる必要がある。

全校児童が一緒に話し合える場を設けたり、他の小学校との交流会で意見が飛び交う討論会をしたりなど、活動を工夫していくことで発表が楽しくなる気持ちを身に付けられると考える。

参考文献

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 東洋館出版社 平成20年
- ・栃窪小学校『平成18年度 研究集録』平成19年